

埼玉育ちのグローバル人

山あり谷あり、自分と向き合う海外生活

第2回 「インドでみた『貧困』の真実」



埼玉県マスコット「コバトン」

平成30年度「埼玉発世界行き」奨学生

鶴山 えりかさん



こんにちは。鶴山えりかです。第2回目の今回は、インドでの生活についてお話したいと思います。インドでは首都ニューデリーの隣町であるグルガオンという場所で、2014年から2018年までの4年弱を過ごしました。記者として経済やビジネスニュースを取り上げ、取材や視察にインド各地を回り、様々な土地や人々に出会う機会に恵まれました。食事はインド料理からイタリアン、韓国料理、日本食まで食べたい時に食べたいものが手に入り、ショッピングも楽しめ、充実した生活を送っていました。

それと同時に、とにかくインドのことを深く知りたい一心で、新聞を読み漁り関連書を買いだめ、インド企業を取材し、村で聞き取り調査をするなど、情報収拾に必死でした。一つには記者として読者の誰よりもインドを知っておくべきだという思いがあったのと、もう一つはインドという国が想像していた場所とまるでかけ離れていたということです。

インドは貧しいというイメージがあると思います。私もそうでした。確かにスラム街が存在しストリートチルドレンもたくさん見かけ、一側面から見れば貧しい国です。しかしスラム街にも学校が存在し、ペットボトルのリサイクルや革製品の製造などのスラム街の住民による経済活動も盛んです。他方では、お金持ちが存在し、若者の起業活動も著しく、モディ現首相のように道端のチャイ売りか

らの上がったというようなサクセスストーリーも珍しくありません。インドに住み始めてまず気が付いたことは、「貧困」という一つのラベルにインドを当てはめることは不可能ということでした。首都ニューデリーの中心街から車で数十分のとある村を訪れた際には、発展レベルの差に驚きました。首都から目と鼻の先であるのも関わらず公共交通機関は乏しく、銀行に用事がある際は数時間も歩く必要があると、村人が教えてくれました。また世界屈指の工科大学を誇るインドで、真夏には40度を超える中で空調設備もない教室で地べたに座って授業を受ける子供達が多くいるということに矛盾を感じました。こうした格差と矛盾は、いたるところで多く見受けられました。



ある小学校に扇風機を寄付した際の写真

日本の高度成長期のような成長を続けるインドで、

なぜその恩恵が下層部まで十分に行き届かないのか、全国民がその恩恵を平等に受けるにはなにを変える必要があるのか、日々疑問を抱いていました。こうした変化を起こすためには、まずは的確な政策づくりが必要ではないかと考え、大学院へ進学し国際開発を一から勉強しなおす決意をしました。世界屈指の頭脳が揃うシカゴ大学を第一志望に据え、半年以上かけてようやく出願。年末年始の一時帰国中に合格通知をいただきました。



インド最南端の地「カニャクマリ」

次回はシカゴでの留学生活について綴りたいと思います。